弘大農学部同窓会会報

第 7 号
昭和61年6月15日　発行
発行　弘前大学農学部同窓会
TEL. 0172－36－2111
振替　盛岡4－564番
印刷　(株)　笹　軽印刷

農学部同窓生に寄せる

農学部同窓会長　横　山　　宏

盛り上がるような新緑の候，同窓生諸氏には緑の精力以上に元気で御活躍のことと存じます。

同窓生の総意と協力により母校弘前大学農学部と同窓会が実施した農学部創設30周年記念事業が絶大な成果と盛り上がりのうちに終了して早くも1年を経過しましたが，つい昨日のことのようで月日の流れの早さを痛感しております。

振り返ってみるに，記念行事・事業の実施にあたっては，その計画及び準備から実施に至るまで，農学部当局担当職員は勿論のこと同窓会役員事務局をはじめ各卒業年度の代表世話役の特段の御理解と御配慮があったればこそ予想以上の成果をあげることができたことで，改めて深甚なる敬意と感謝を申し上げる次第であります。

又，弘前大学の他学部から記念事業等について賞讃の声があると聞き及んでおり，関係者と共に誇りに思ってもよかろうと存じます。

30周年記念事業は60年に殆んど終了したことになっていますが，農学部独自に文部省の特定研究経費の助成を受けて『農学研究からみた青森県農業―問題点と展望―』を創立30周年記念研究報告として3月末日に出版配本されたことで一切完了いたしました。

まだ全文を読み終えていませんが，殆んどの教官が専門分野を分担執筆され青森県農業をあらゆる角度から観察検討研究され，問題点と展望を提示しておられます。各教室の個性も十分汲み取ることができ，今後の方向等の提示の中には将来歴史的評価に俟つ事柄があるとしても，それは当然のこととして特に県内在住の同窓生には御一読を願いたいと思います。

農学部創設30周年記念事業の1つでありました『30年のあゆみ』を暇を見ては読み返すこともあるのですが，草創の頃と現在では何と価値観から生活様式に至るまで大きな変化がみられることか，枚挙に暇がないしまして高齢化社会が現実のものになってみれば，近い将来の産業構造も国際化の進展も未来学者が10年前に予測したよりも早いテンポで進むであろうことは間違いのないところであります。生物工学，情報システム等のエレクトロニクスの進歩発展は産業のみならず社会・生活等各分野に大きな影響を及ぼしつゝありますが，空恐しい管理化時代に足を踏み入れてもう後戻りができない状態になりつつあると言っては過言でしょうか。

現在農業後継者の養成施設である青森県営農大学校長として高校卒の就農予定学生を面倒見ているものゝ本県の就農者約16万人，うち60才以上が約3分の1の就農構造にありながら，後継者はUターン組も含めて年に300人前後よりいないという現実は，この先どう変るとみればよいのか悩んでしまいます。或る県の報告では，年間新規就農者は遂に100人を割りました。日本全国共通の現象でしょうが，農業経営を目指す青年よりサラリーマン農学士の数が多くなるのも遠い将来の話ではなく明日の事実になろうとしています。

農学は進歩して農業全体は地盤沈下してい

るこの現実は否定できませんが，いかに部分的にでも地域的にでも優れた農業を子孫に引継がせるか，そのための方途方策について学者も農業指導者も勿論農業経営者も知恵を出し合う時だと思います。

同窓生各位の御活躍を祈ります。

〝農学部創立30周年記念研究 農業研究からみた青森県農業〟のこと

編集委員会委員長　田辺良則

本学における農学研究は，すでに教官88名，学生2,399名，大学院生104名，計2,591名がこれにたずさわってきた。教官の何人かが学生と，院生のほとんどが学生とダブるけれども，わが農学研究は，実員で2,500名になんなんとしている（昭和60年7月現在）。論文数でいえば，教官平均20編として1,760編，学生の卒業論文，院生の修士論文を合わせると4,263編，膨大なものとなる。農学部30年文理学部時代を加えて35年の蓄積である。

この農学研究は基礎・応用両面にわたっていて，その膨大な論文のうち，少なからぬものが，青森県農業の諸側面・諸要素をその研究対象とするものである。これらの研究過程で，多くの教官が，青森県農業について多かれ少なかれ問題を感じ改善を考えるようなところがあった。

創立30周年を迎えるに当たって，このことをつきつめてみようと思いたち，各教官がそれぞれの「農学研究からみた青森県農業―問題点と展望」について，関係資料を整え，既往の研究を整理し深めて，まとめることにしたのである。そこには，本学部の創立から今日まで，陰に陽に多大の支援と協力を惜しまれなかった青森県の農業者や農業関係者の御好意に報いたいという気持もあってのことであった。

幸い文部省の特定研究経費の助成を受けることができ，乏しい農学部の研究費を補充するとともに，成果の印刷の見通しを立てることもできて，十分とはいえないまでも財政的裏付けがえられたのであった。

研究課程では現状分析が主となるが，52名の教官全員参加の，この研究において，現状分析部分まで収録することになれば，報告書が膨大なものとなって財政的にも困難なうえ，読者も困るだろうということで，報告書には，第1章の導入部のほかは，主として専門分野ごとに「問題点と展望」ないし改善策を提示することとし，現状分析や研究過程については問題点と展望の理解のために必要な最小限にとどめることにした。

また，この研究の計画段階では，現職教官だけでは，青森県農業の全領域はカバーし切れないので，研究の職にある卒業生の協力を仰ごうと考え，一部内諾をえたりもしたが，現職教官だけで取り組むことになった。本務に忙殺されている卒業生に御迷惑かけては，などの理由からであった。

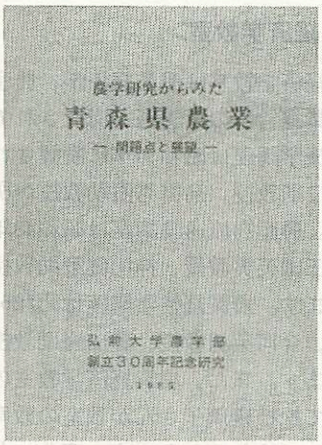
それにしても，現職教官52名（途中斎藤善一教授の転出，神田健策助教授の転入があって，実質53名）が，青森県農業という一つの研究に，同時全員参加ということ，これ自体，本学部として記念さるべきことかも知れない。他学部の友人から「農学部でなければできないこと」と，うらやましがられたことではあった。

もちろん，大勢のことではあり，健康のこと，研究進行状況のこと，他研究との競合のことなどを考えると，はたして？，と心配しないではいられなかった。中間報告のなかで自信が湧き，期限がきてもなかなか集まらない原稿に自信を失ったりしながら，全員参加の完了に重点を置いた。そして，全員参加は完了したのであった。

こうして，53名による，B5版325頁の記

念研究ができた。手にとればズシリと重いその手応えに，そこにあるもろもろの不足，不備，欠陥を超えて，胸に迫るものがあり，誰にともなく感謝したい気持ちが湧いてくる。不足，不備，欠陥の少なからぬ部分が編集の責任であるという自責の思いをも超えてである。

思えば，この記念研究も，本県の農業者，農業関係者，本学の職員，私ども研究者，そして卒論・修論の研究過程を考えれば同窓生の協同の成果である。この記念研究を機会に，さらなる協同を築いて行ければと念じている。



教室だより

≪生物化学講座≫

当教室は園芸化学科の中で最も新しく，現在の３名の教官（教授 沢井，助教授 奥野，助手 宮入）は昭和44年から47年にかけ着任しました。以来一貫して植物病原菌（特にリンゴの病原菌）の植物毒性を有する代謝産物の検索，単離，構造決定とその関連ペプチドの合成を中心に研究が行なわれてきました。その他に助手の宮入が同じ植物病原菌を材料に各種酵素，特にペクチン質分解酵素について酵素化学的，あるいは病理学的見地から宿主との反応という面で研究をすすめています。このように当研究室では低分子の有機化合物から，高分子の多糖，酵素さらには抗体にいたるまで広範囲な分野を扱かっており，そのため使用機器も多種多様で教室以外の機器の世話になる機会がますます増えてきています。47年当時は数えるほどしかなかったガラス器具類もようやく実験台を満たすようになりましたが，高価なガラス器具の破損は相変わらずで，最近は老朽化した機器の故障も相つぎ，苦しい台所事情は昔とさほど変わっていません。

数年前に還暦をすませた沢井先生は，農学部でも最長老の部類に属していますが，相変わらずお元気で，毎日桜ケ丘の自宅から，20分の道のりを自転車で通っています。ただここ数年大声で学生をしかりとばすようなことはなくなり，多少寂しい気もいたします。

研究者としていよいよ円熟期にある奥野先生は，研究と教育に一段と情熱をかたむけていらっしゃいます。またテニスの方も欠かさずつづけている様子で，健康の維持管理にも余念がありません。助手の宮入も白いものがだいぶ目につくようになりましたが，いまだ学生達とは苦楽を供にしています。３教官とも10数年かわらずそのまま年をとったわけで，教室としての研究のペースは多少おちてきているような気もします。

今年の教室所属学生は11名で内訳は４年目９名，大学院１名，研究生１名となっており，例年より若干少なめです。ただ女子学生は４名とこちらは多目です。

最後に全国で御活躍の卒業生の皆様，仕事の息抜きにぜひ弘前を訪れ，教室にお寄りください。特に生化教室創設期（40年）の頃の卒業生にはぜひ当時のお話をうかがいたいものと思っております。岩木山は昔と少しも変わっていません。研究室の方も多少財産が増えた以外は昔のままです。

（K・M記）

≪農業経済学教室≫

農業経済学教室は農業経済学，農産物流通論，農業経営学の3講座で構成されています。農業経済学講座は昭和30年に設置され，現在は田辺良則教授，高橋秀直助教授が所属しています。農産物流通論講座は昭和48年に設置され，三国英実教授，神田健策助教授が所属しています。農業経営学講座は昭和55年に設置され，今河英男教授，豊田隆助教授が所属しています。また，農業経済学教室の事務職員として松枝雍璃子さんが教室の教育・研究を補佐してくれております。東北・北陸地域の農学部の中で，農業経済関係の講座を3講座擁しているのは弘前大学のみで，今後の計画として農業経営学科の設置をめざしております。

農業経済学教室では，故宮下利三教授がおられた時期より，青森県の主産物であるリンゴの経営と流通に関する研究を一貫して追求しております。また，教室の研究スタッフの充実にともない，経済学の基礎理論，農業生産力構造の分析，農産物市場構造の分析，農業協同組合論，農業政策論など，研究対象範囲も広がっております。教官6名に対して，1学年の学生数が10名ということで，学生への教育では濃密な指導に心がけております。2年目の教室所属から講義→演習→卒業研究という流れの中で，農業経済学の専門的力量を高めて卒業できるようにしております。とくに卒業研究では3回の中間発表会を設け，全教官の合意のもとに一定のレベルに達したばあいに合格できるという体制をとっております。学生からは「きびしい」という意見も聞かれますが，学生と教官との間の切磋琢磨によって，活力のある教室づくりをめざしております。

昭和30年に農業経済学教室が設置されてから，今日まで学生225名，院生5名の卒業生を送り出しております。卒業生の皆さんは社会の各分野でご活躍のことと思います。昭和61年3月には，最近ではめずらしいことに16名という「大量」の卒業生を送り出すことが出来ました。参考までに，その就職状況をお知らせしますと，地方公務員2名，農業団体3名，生活協同組合3名，流通・金融・サービス業等6名，大学院進学1名，自営1名です。

最後に卒業生の皆さんのご健康と一層のご活躍を念願致しますとともに，近くに来られた折には是非お立寄り下さることを期待致します。　（H・M記）

新任教官の紹介

果樹園芸学講座

荒　川　　修

6月に助手として着任しました。山形大学を54年に卒業し，修士課程に進み，東北大学の博士課程に編入して今年3月に修了しました。出身は山形県白鷹町で，家でもリンゴ，オウトウ，米などを作っています。リンゴ作りの本場で，じっくりと研究にとりくみたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

新たに迎える正会員

農学科（30名）

農学コース（14名）

鈴木　利男（作物）ブルボン北日本食品工業㈱
滝口　謙治（〃）ホクレン農業協同組合連合会
庭瀬　義裕（〃）自営（農業）
野呂　文人（〃）青森県農業協同組合中央会
山田　正樹（〃）富山県砺波市農業協同組合
大山　文郎（育種）東北農政局
鎌田　久和（〃）本学大学院
小山　由彦（〃）帯広統計情報事務所
松浦幹一郎（〃）福島県庁農政部
柳本　香織（〃）未定
木村　　進（畜産）青森県庁
福士　浩行（〃）本学大学院
三浦　良成（〃）本学大学院
横溝　久志（〃）日糧製パン㈱

農業経済コース（16名）

大溝　雅昭（経済）日栄住宅資材㈱
古川　栄一（〃）弘南生活協同組合
藤田　英雄（〃）日本たばこ産業㈱
山田　　徹（〃）秋田日本信販㈱
渡辺　克司（〃）本学大学院
長内　智幸（〃）ジャスコ㈱
島倉　良成（流通）北海道信用農業協同組合連合会
仲島　亮介（〃）北海道庁
丸山　正次（〃）群馬県経済農業協同組合連合会
室松　正賢（〃）ホクレン農業協同組合連合会
青能　　薫（〃）札幌市民生活協同組合
外崎　栄作（〃）未定
池田　雅則（経営）静岡県庁
磯部　仁志（〃）王子不動産
工藤　裕治（〃）中三㈱
紺野　昌樹（〃）宮城市民生活協同組合

園芸化学科（38名）

赤平　次郎（園産）山崎製パン㈱
佐藤　直幸（〃）ヤヨイ食品㈱
西沢　洋一（〃）青森県農村工業農協連合会
原子美恵子（園産）栄研化学㈱
増川　　禎（〃）未定
町田　充弥（〃）福島県庁
渡部　正人（〃）秋田県本荘市職員
難波　基彦（〃）山崎製パン㈱
相馬　郁睦（〃）東北化学薬品㈱
古川　将人（〃）日本美術印刷
大島　郁哉（〃）未定
大江　直広（農産）京食㈱
小野　幸輝（〃）青森県職員（臨時）
柏木　順一（〃）カネサ味噌㈱
日下　恒彦（〃）岩手県庁
小段　健男（〃）フジッコ㈱
西塚　美香（〃）本学大学院
藤村　将史（〃）日本アップジョン㈱
前田　育子（〃）陸奥製菓㈱
石藤　一馬（生化）本学大学院
上村　康浩（〃）第一ブロイラー㈱
金沢　賢一（〃）福島県庁
狩野　秀明（〃）未定
木村千家子（〃）雪印乳業㈱
工藤　敦子（〃）秋田農業短期大学
歳原　雅則（〃）岡山県賀陽町職員
本山　英之（〃）新化食品㈱
山口　文博（〃）陸奥製菓㈱
貝沼　　謙（〃）山崎製パン㈱
井出　剛志（土肥）本学大学院
今泉　智仁（〃）丸大食品㈱
菅原　美江（〃）東北ニチイ㈱
鈴木　和世（〃）宮城県教員
田口　裕文（〃）秋田県教員（臨時）
横田　智栄（〃）トラベノール㈱
菊地　篤志（〃）未定
工藤　　久（〃）東北化学薬品㈱
田中　　勇（〃）未定

農業工学科（36名）

農業機械コース（12名）

泉　　悟（機械）未定

長内　常之（機械）前川製作所㈱
葛西　要一（〃）本田技研工業㈱
熊谷　淳一（〃）津軽広域水道企業団
堀岡　政基（〃）未定
宮本　雅彦（〃）石川島芝浦機械㈱
宇都木広基（動力）日立東部セミコンダクタ㈱
小林　堅二（〃）丸山製作所㈱
奈良　俊司（〃）日立東部セミコンダクタ㈱
畠山　正直（〃）石川島芝浦機械㈱
藤田　清文（〃）東北佐竹製作所㈱
古城　和幸（〃）山本製作所㈱

農業土木コース（24名）

伊藤　真二（水利）日本道路㈱
植椙　正貴（〃）静岡県庁
高橋　忠行（〃）東北農政局
日照田　智（〃）内外エンジニアリング㈱
広島　信二（〃）青森県警
和田　孝（〃）東北農政局
石村　英明（〃）北陸農政局
小笠原秀輝（農地）細川産業㈱
倉内　英雄（〃）日本電信電話㈱
高橋　徹（〃）徳山市農業協同組合
高橋　信雄（〃）富士通東北通信システム㈱
豊川　康文（〃）本学研究生
増澤　亨（〃）本学研究生
松田　司（〃）芝茂造園建設㈱
脇　武仁（〃）楢崎産業㈱
東　弘幸（造施）北居設計㈱
浮須　一彦（〃）新潟県庁
金野　英明（〃）本学聴講生
白山　幸一（〃）本学研究生
鈴木　剛（〃）日本航空㈱
滝上　克彦（〃）鴻池組㈱
渡部　哲雄（〃）青森スキー製作所
福井三十六（〃）青森ミサワホーム㈱
工藤　智樹（〃）アンデス縫製㈱

園芸学科（25名）

阿部　康生（果樹）本学研究生
飯高　朋子（〃）環境管理センター
長内　昌彦（〃）青森県庁
川口　勝弘（〃）富士通東北システムエンジニアリング㈱
工藤　康博（〃）自営（農業）
今野　勉（〃）自営（農業）
中村　豊（〃）青森県教員
成田　貢（〃）青森食糧事務所
斎藤夕紀子（蔬花）宮城県庁
土肥野幸利（〃）本学大学院
中島　清人（〃）自営（農業）
中村　圭吾（〃）王子緑化㈱
奈良　愛美（〃）クリーンサービス青森
工藤　博司（植病）北海道大学大学院
斉藤　仁志（〃）青森県庁
佐藤　郁（〃）宮城県庁
佐藤　裕（〃）アグロ・カネショウ㈱
高橋　哲（〃）岩手県庁
近松　玲司（〃）青森県警
土岐　君仁（〃）トヨタオート荘内㈱
本田　義和（〃）第一ブロイラー㈱
佐藤　吉勝（昆虫）荘内経済農業協同組合連合会
田中　一裕（〃）本学大学院
土肥野利幸（〃）農水省名古屋植物防疫所
中河原正英（〃）東北農政局

大学院（4名）

農学科（1名）

井上　達志（畜産）本学研究生

園芸化学科（2名）

佐藤　健一（生化）宮城県庁
清藤　文仁（〃）本学研究生

園芸学科（1名）

福士　好文（植病）青森県庁

年　表　（昭和59年9月～同61年6月まで）

昭和

59. 9. 8～9　旧金木農場建物において，最後の学部・農場交流会（約50名参加）
9.　大学内で車・バイクの一部進入禁止区域を設定
11.15　弘大農学部同窓会会報第4号発行
11.20　佐々木農学部長，産業教育100年記念教育功績者として表彰される
12. 1　初めて学部教職員合同泊りがけ忘年会行なわれる
12.29～60. 1. 4　年末年始の宿日直業務を民間警備に委託
1.16　学術講演会『農学の思想を考える』
東京大教授　椎名重明
3. 4　昭和60年度入学試験行われる
学部倍率4.5倍（農学コース5.2，農経コース7.0，園化2.7，農機コース5.1，土木コース6.6，園芸3.8）
3.12　工学部設置に関する答申，評議会で審議
3.15　弘大農学部同窓会会報第5号発行
3.22　卒業式（農学部111名，研究科6名）
3.31　事務官定年制（3／31日付施行）
4. 1　坪松戒三教授　学部長となる
附属農場長に森教授発令（再任）
情報処理センター設置決定
（11／12　規則制定）
＊この年の入試検定料10,000，入学金120,000，授業料252,000
4.17　学生の臨時増募10名受け入れ可能と決定（教授会）
5.28～29　テネシー大学マーチン校（UTM）との交流10周年記念行事行なう
6.28～7. 2　第36回東北地区大学総合体育大会が本学で開催（40大学5237名参加）
7. 1　農学部創設30周年記念　記念誌「30年のあゆみ」発行
（B5，357ページ）
7. 5　農学部創設30周年記念彫塑，「望蒼天」除幕式，同祝賀会（大学会館　130名参加）
60. 7. 6　農学部創設30周年記念講演
（文化センター）
『研究者，教育者として考えること』
秋田農業短大教授　松本勤（同窓生）
『農学部創設期のころ』
弘大農学部教授　佐々木信介
農学部創設30周年記念式典（法華クラブ　参加者約400名）
10. 8　工学系学部設置検討委員会規則の制定
11.15　弘大農学部同窓会会報第6号発行
11.30　下北支部発足
12.10　情報処理センター増設工事竣工
12.24　学術講演会『農産物過剰問題について―牛乳を中心に』
北海道大助教授　鈴木敏正
61. 1.22　学術講演会『青森県93年間の米とりんごの作況について』
元りんご協会　波田江久吉
2. 1　東野修治（医学部長）学長に就任
2. 5　特別講演会『オーストラリアの顔―自然・人々・大学―』
ニューサウスウェルズ大助教授
Dr. H・J・ウィレッツ
2.18　弘前大学組換えDNA実験安全管理規則の制定
3. 4　昭和61年度入学試験行われる
学部倍率3.6倍（農学コース3.0，農経コース4.5，園化2.2，農機コース5.3，土木コース5.2，園芸3.3）
3.20　卒業式（農学部129名，研究科4名）
3.31　農学部創設30周年記念研究「農学研究からみた青森県農業―問題点と展望―」発行（B5，300ページ）
4.　国立大学受験機会の複数化，弘大Bグループに決定
＊この年の入試検定料21,000，入学金150,000に値上げ
5.31～6. 1　日本菌学会第30回講演会開催（教養部）
6. 1　学内交通規則（車，バイク）

支部だより

下北支部同窓会

下北支部は，昨年の末に本部の豊川先生や当地区の三浦農林課長のご尽力により発足できました。昨年の11月30日の結成会には佐々木・工藤の両先生をお迎し，80%の出席率で料亭みなづきにおいて盛大に行われました。

前学部長の佐々木先生の地域に働きかける農学部出席者のあり方と励しを含めてのご挨拶で，セレモニーも終了。自己紹介から始った懇親会は話もはずみ，互に意気が合い，連携も更に強まり，農学専門職のあり方の再確認の機会となり，収穫の多い会合となりました。

下北支部会員は現在18名，県職関係が11名，市村職が3名，教員3名，会社員1名とほとんどが公務員，50年以降の卒業者が60%，地元出身者が4名といった構成が本支部の特色となっています。各自の職場も水産から教育と広く，学部の講座にない分野での活躍も多く下北の現実に直面している姿を目のあたりにした。広く農林分野を駆け巡る，若く情熱的なビジョンには，さすが農学部出身だとの感がひとしおであった。〝下北をものにできる者でなければ県の指導者にはなれない，なぜならば，青森県は日本の下北だ!!〟と将来へ向っての意欲的な発言が特に印象的であった。

名・実ともに一番若い支部としての今回の発足，いろいろな問題をかかえています。運営等について，先輩の方々のご助言をいただき，明日の下北のために，全会員の力が反映できるよう努力して参りたいと思います。今後ともよろしくお願い申しあげます。

支部長　平井記

※※※※※※※※　おねがい　※※※※※※※※

昭和61年度同窓会名簿は11月発行の予定で準備を進めておりますが，同窓会費納入状況がおもわしくありません。名簿は会費納入者へ配布することになっておりますので，未納（60～61年度分）の方は，至急納入していただくようお願い致します。

さらに，住所変更された者は事務局まで御一報ください。

学内人事

五十嵐康雄助手　　助教授昇任
（農産物利用学講座）

弔　　事

加藤　和助（49年農業動力学卒）
横内　光信（57年農業動力学卒）